夕焼け通信 1345号　2022.3.14
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２） 91

木幡智恵美

職場復帰（1）

今は、車に子どもを乗せるのにチャイルドシートが義務付けられている。娘が職場に復帰し、迎えを頼まれたら、三つのチャイルドシートが必要だ。夫は宗矢の泣き入りけいれんを恐れていて、一人での迎えは無理だ。二人での迎えとなると今の軽自動車では座席が足りず、車を買い替えねばならないと夫が言う。けれども、四月になると、寛大が小学校に行くので、二月、三月の二か月だけだ。何とかならないかと考え、いいことを思いついた。娘のスペアキーを預かり、軽自動車でまずは託児所に宗矢を迎えに行き、娘の勤務先の駐車場で娘の車に乗り換え、すぐ側の保育所に行って寛大と実歩も迎える。仕事を終えた娘は、軽自動車に乗って我が家に来る。そして、自分の車に三人を乗せ、玉湯に戻っていくというふうに。

初めて三人を迎えに行った際は、宗矢はずっと私の胸から離れず、ぐずぐず言い続けた。抱いたまま車に乗せ、娘の車に乗り換える際、チャイルドシートに座らせようとするが、私から離れない。仕方なく夫が保育所に寛大と実歩を迎えに行っている間、助手席でそのまま抱っこし、違反は承知しながらも、大泣きすると怖いので、抱いたまま我が家へ。家に着いて、寛大と実歩がブロックやパズルで遊んでいる間も、宗矢は一時たりとも私から離れようとしない。しばらくはこういう状態が続くだろう。それでも、夕食を摂る段になると、宗矢は黙々と手でご飯やおかずを口に入れ続けた。

その週末、娘が三人の子どもを連れてやってきた。寛大が保育園の卒業記念写真を撮るというので実歩と宗矢を預かった。朝から快晴で、日の当たる仏間に連れて行って遊ばせた。娘が居ない間、泣き入りけいれんが起きたらどうしようかと不安だったが、歌の絵本で機嫌よく遊んでくれた。実歩が時々宗矢の相手をしてくれて助かる。日に日に託児所には慣れてきているようだし、四月からは実歩と同じ保育所に通うようになるのだから、心配するほどのことはないかもしれない。寛大の小学校入学もあり、職場復帰した娘は、忙しくなるだろう。できるだけ手伝ってやらねばならない。

義母のところに着替えを持って行き、洗濯物を預かると、「今、お茶を飲んでおられますよ」とのこと。安心して帰った。

がらがら橋日記

宮森健次

スープ担当

料理は、これまでずっと妻に任せっぱなしにしていた。味覚もおそらく鈍い方の部類だから、自分で作りたいなどと思うこともなかった。自分がおいしいものは、だれにとっても同じようにおいしく、まずいものはみんなもまずい、それ以上でも以下でもない、と長いこと思っていた。どうもそんな単純なものではないらしいと気づいたのは、世の中には、微細な味の変化を感じ取る人がいるというのを目の当たりにしたからである。同じ物を口に入れて、ぼくが「うまい」と感じて完結しているところを、その人は何によってうまいか、なにゆえもの足らないか、何を加除すればさらによくなるか、を追わないではいられない。その加除すべき素材や調味料についても、一般名詞のそれではなく、固有名詞なのである。燻製を作るには、桜からこしらえたチップでなければならず、この肉に合わせるのは、○○産のバルサミコ酢に限るといった具合だ。

「宮森さん、何を入れたらいいかわかったよ。」

表情はややこしいパズルがついに解けたときにそれだ。

彼は、何が起きているのかよくわからないぼくの手から椀を取って、何やらつまんで入れた。

「これ、○○のとろろ昆布。どう？」

この最適解を得たことをともに喜んでくれ、とでも言うようにぼくの言葉を待つ。ぼくは戸惑いながら、最もつまらない感想をおずおずと返す。

「はあ。おいしいです。」

「でしょう。全然違うよね。」

高揚を隠さぬその人を前に、確かにおいしくはなったかもしれないけど、ぼくにとっては「うまい」の誤差の範囲です、とはとてもじゃないが言えなかった。一つの味を得るのに、手間暇をまったく惜しまぬ人がいるのだ、と驚いた。

その人は、後にパン屋さんになった。食通を満足させると評判だ。

ぼくはといえば、今は妻と分業して時間差で台所に立ち、スープを担当している。習慣とはおもしろいもので、毎日作っていると、味覚の閾値も変化してくるものらしい。レシピを見ながらどう手を加えたものか考えるようになった。一品加えるためにスーパーへ再度向かうのだって苦にならない。退職前には、こういう自分を想像していなかった。

いずれ一人で台所に立つ時が来るかもしれず、そのために料理の経験を積んでおくことが必要なのだ、と初めは思っていた。そんなことの前に、ただ楽しく生きるために必要なことだったんだと今は思う。

30代フリーター　やあ、ジイさん。世界の戦争の「本流」は、破壊と流血をともなう「熱い戦争」から、抑止力を競い合う「冷たい戦争」に移った。その理由のひとつは核兵器が使えない兵器となったことにある。ジイさんはしきりにそう言っていたが、プーチンはそれを次々とくつがえしていっているように見える。ウクライナに大がかりな「熱い」侵略戦争を仕掛け、核の使用まで示唆している。

年金生活者　戦争の「本流」が「熱い戦争」に逆戻りし、核はふたたび使える兵器となるのか。期待も交じえて言うなら、そうはならないだろうと考えている。ロシアは侵略戦争を続ければ続けるほど泥沼にはまる。それにはアフガニスタン戦争、イラク戦争の先例がある。それによって軍事的に弱ったアメリカは「熱い戦争」から遠ざかった。ロシアに対して軍事的な対抗を初めから放棄していることにそれがあらわれている。

もしプーチンがウクライナで通常兵器による戦争に行き詰まり、ウクライナかNATO諸国を核攻撃したらどうなるか。それでもアメリカは核で報復することを避けようとするだろう。ヨーロッパを核の戦場にすれば、勝者なき第3次世界大戦になるかもしれない。プーチンが今度の戦争で核使用を示唆したとき、バイデンが取り合わなかったのも、報復を避けたい意思のあらわれと見ることができる。

また、プーチンが核使用に踏み出しそうなったとき、アメリカの核報復を恐れるロシア国民が死に物狂いで彼を権力の座から引きずり降ろそうとする可能性も想定できる。大きな流れとしては「熱い戦争」「核戦争」が世界の戦争の「本流」に戻る兆候は見られない。

30代　ウクライナは自国の上空に飛行禁止区域を設けるようNATOに求めていたが、拒否された。

年金　飛行禁止区域を設定すれば、NATO軍機が監視飛行をするので、ロシア軍機を攻撃することがあり得る。「そんなことになれば、欧州で本格的な戦争になる」とNATO事務総長のストルテンベルグは言い、米国務長官ブリンケンも「バイデン大統領は、ロシアと戦争はしないと明確に言っている」と同調したと報じられている（3月5日産経新聞ウェブ版）。

ウクライナ大統領ゼレンスキーは「あなたたちの弱さのせいで、人々が死んでいく」とNATOを非難したという（3月5日産経新聞ウェブ版）。ウクライナの苦境を背にした彼の訴えは多くの共感を集めるに違いない。ロイター通信の米国での世論調査では、74％がNATOによる飛行禁止区域の設定を支持すると答えている（3月5日時事ドットコムニュース）。

だが、NATOがこれに同調することはないだろう。それをすればロシアとの核戦争のリスクを負わなければならない。NATOの最大の使命は「熱い戦争」を避け「冷たい戦争」を遂行することにある。世論に同調すればその使命に背くことになる。国家ではないNATOは個々の国家の国民世論に従う必要もない。

第2次世界大戦を最後に「熱い戦争」は世界の戦争の「傍流」になった。ロシアのウクライナ侵略はこの「傍流」の川幅を先日までよりは広げた。それが「本流」になるほど広がると予測し得る理由は見つからない。

30代　ロシアのウクライナ侵略をめぐって橋下徹が、戦うのか、逃げるのか、降伏するのか、といったことを考えていくのが、国家運営、戦争指導だ、という趣旨のことをテレビの情報番組で発言し、右からも左からも批判されている。

年金　人命を優先する「冷たい戦争」が「本流」の時代には必然的に出てくる主張と言うことができる。

橋下は「国防は戦争が始まるまでが勝負で、軍備力を強化して、それから軍事同盟を強化して、それこそ核兵器も持つ、ないしは米軍基地をしっかり置く。こういうことで戦争にならないようにきちっと態勢を強化することが重要」と番組で語ったと紹介されている（3月6日スポーツ報知ウェブ版）。

彼はロシアの侵略を「ある意味、究極の災害」と言い、「できる限り多くの人が逃げる、国外退避させることに西側諸国は力を入れないといけない」と説いている（同）。戦争を「災害」ととらえ、「避難」に力を注ぐことを訴える主張は、国家の大義よりも人命の尊重を優先する考えと言っていい。そこから「『ウクライナ頑張れ』って、いつまで頑張らせるのか。最終的には国際社会がプーチンと話をするのか。政治的な妥結で解決するしかないと思います」（同）という考えが必然的に導かれる。

こんな主張が宗教的な絶対平和主義者や急進的な左派からではなく、保守派の元政治家から出てくるところに「熱い戦争」が「傍流」となった世界の現在が示されている。

30代　橋下の発言に右のほうからは「私は、きわめて複雑な事情を考慮しながらも、戦い続けることに意義をみます」（細谷雄一）などの異論が、左からは「橋下徹がNATOはプーチンに屈服しろと言っている」（町山智浩）といった批判が寄せられている。

年金　私の目には、どちらの視線も、戦争の「本流」の転換という世界史的な変化に届いていないように見える。

ニュース日記　823

中村　礼治

「熱い戦争」と「冷たい戦争」